中央アフリカ共和国の旅（3）

～密林のキャンプ～

小　村　幸二郎

デ マ イ ヨ の 泉

2月14日　午前6時起床　今日も雲一つない上天気である．　朝食は　相も変らず　コーヒーとパンだけであった．　このような朝食のばあいには　目玉焼かオムレツぐらいは添えられているものだが　養鶏場もなければ鶏を飼っている家も数少ないので　卵を購うことは難かしく　わびしくはあるがいたし方ない．

1リットル約80円のガソリンを補給して　7時20分にクランペルを出発した．　目的地は　この国の中央部に位置する構造帯の一部である．

国土のほとんどがサバンナと密林とラテライトによっておおわれているこの国で　しかも50万分の1地質図幅を唯一の頼りに　短期間の調査旅行で　鉱床の露頭や徴候地を発見することは至難の業といっても決して過言ではない．　そのことを考えただけでも　本当に気が滅入るようだ．　しかし　いかに調査に不向な土地であっても　また　いかに短期間の調査旅行ではあっても　それを成し遂げることが自分に課せられた責務であれば　たとえある程度の身の危険を承知の上でも　ただひたむきにそれに立向うだけだ．

しかし　身も心も責めさいなむそうした努力を続けたとしても　真に喜べる結果が得られなかったばあいには一般には　この調査旅行に対する　あるいは　この技術援助に対する評価は　多分　無惨なものであろう．

一つの仕事に対する評価は　えてして　その過程を軽視し　その結果に対してなされがちなのが世の習いである．　だが今は　結果がどうであれ　困難に満ちたこの調査旅行に従事する自分の姿をよく理解してくれる人が必ず居ることを信じ　それを心の大きな支へとし　そしてまた　日本人技術者として　はじめてこの国の国造りに参加させてもらえた誇りと喜こびと　絶えず野生の危険にさらされながら生きるこの国の民の一人として生きる日の自分の姿の喜びとを支えとして　最大の努力をすること以外には考えないことだ．　それ以外には　これから先の苦悩をなぐさめてくれるものはない．

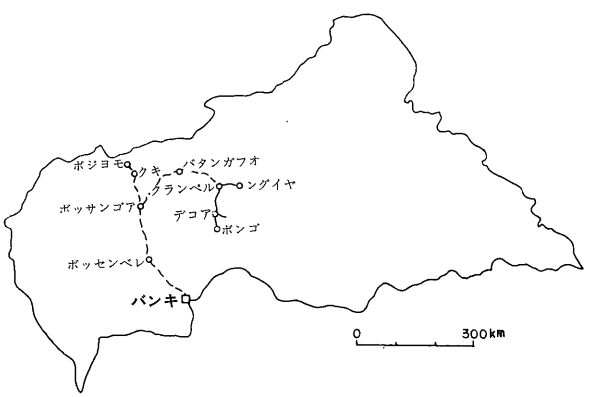
クランペルから南方へ向う道路傍に建ち並ぶ家のたたずまいはこれまで見てきたものと変りはしないが　郡役場の所在地としても大きな町だけに　活気がありそうだ．バタンガフオにくらべれば　商品も多く　病院もあり学校も大きいらしい．

大した産業もないこの地域では　綿花の収穫時期である今が　一年の中でもっとも活気を呈しているのかもしれない．　山のように積まれた綿花を　大型の集荷トラックに積込む人々の顔はほころび　陽気な掛声も心なしかはずんでいる．

道路は　クランペルの南方12km の地点で　ケモ・グリビンギ県の県庁の所在地であるシブツからバミンギ・バンゴラン県の県庁の所在地であるンデレへ向う国道8号線に連絡していた．　そして　この分岐点から8号線に入って間もなく　これまで続いていたサバンナは絶えて　密林地帯に入ったが　それも長くは続かなかった．

サバンナと密林とが不規則な分布をなして入り混っているせいか　両者の移り変りは実に目まぐるしい（第2図）．　クランペルからおよそ 65km のデイッシコ川を渡った所からはじまる部落は　道路の両側にへばりついている一列づつの家並をかかえているだけではあるが予想以上に戸数は多い．　道路傍で立話をしている老人に　デマイヨ部落がどこかを　尋ねてみた．

地図の上ではデイッシコとされているここが　老人の話では　デマイヨということだ．　デマイヨという地名は　多分　デイッシコのごく限られた部分を指すのであろう．　地図にも記されていないデマイヨ部落をはるばると訪ずれた理由は　ここが先に述べた構造帯の北端に近く　そして　温泉が湧出しているという情報を得たか

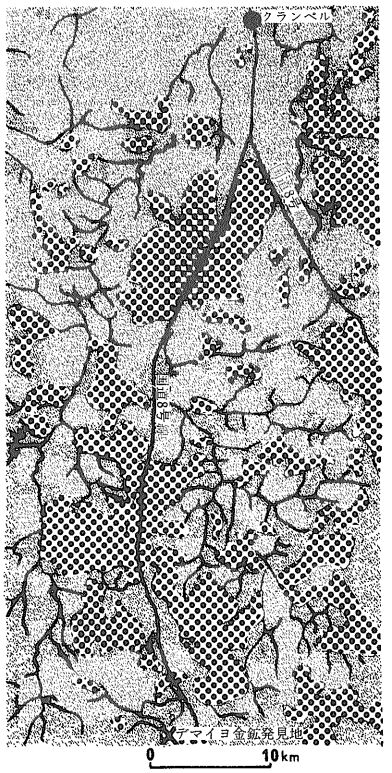


第1図　　踏　査　図

らである．　もっとも　温泉と鉱床露頭の発見とを直接に関係づけることは適当ではないが　温泉の湧出孔では岩盤がみられるだろうということ　湧出孔近くの中で各種の転石はもちろん　うまくいけば鉱石の転石や砂金が発見されるかもしれないこと　そして　めったにみられない先カンブリア系中の温泉をみることができるということなどの期待をもったからである．　しかしそれは期待というよりはむしろ　何かを発見しなければおめおめと帰れないという重苦しい義務感から自分を解放しようとする願望の一つのあらわれであるといった方がより正しいかもしれない．　喜びを得るか　所詮はかない挑戦に終るか　運を天に任せたこの勝負は　早ければ1時間ぐらい後にはケリがつく．

デマイヨから西へ 3km の地点にあるという温泉を目ざして　折良く居合わせた小学校の先生に案内されて出発した．　温泉へ向う道は幅 1m にも満たない細い道ではあったが　地形が平坦な上にサバンナ地帯なので比較的に歩きやすい．　部落を出発しておよそ30分の後に　道は下りとなり　間もなく　密林の中へ入っていった．　巨大な倒木を乗り越え　藪をかけ分けて下りて行くのは決して楽ではないが　それも長い道程ではなかった．

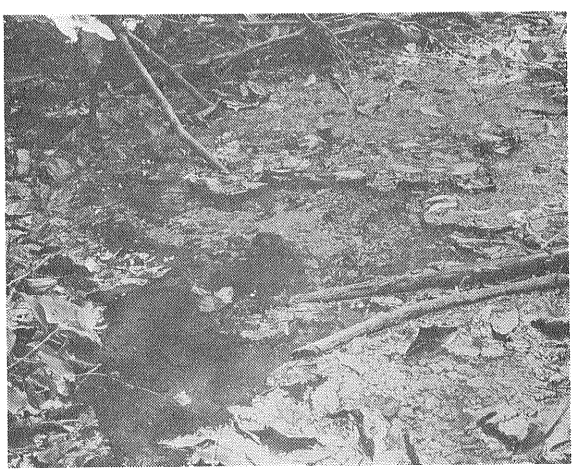
温泉は　中央構造帯の北東縁部を構成している石英片岩の割目から湧出しており（第3図）　無味無臭で透明な湯の温度は 45°C であった．　湧出量は一日に25 t ぐらいらしい．　湧出孔の近くのくぼみに　金色に光っているものがある．　拾い上げてみると　それは5フラン硬貨であった．　誰かが入れておいたのか　または　落したのかはもちろん分らないが　私は　ここを訪ずれた記念に　その硬貨をポケットに納め　代りに　10フラン硬貨を沈めた．



第2図
クランペル南部のサバンナと密林（打点部）樹枝状の部分は　川に沿って回廊状に発達する密林．

湧出孔の前には　幅およそ2m　深さ 30cm ぐらいの小川があった(第4図)．　川底に転がっている礫の多くは珪岩礫や石英片岩礫である．　それらの礫に混って石英脈の礫らしいものがある．　そしてこの礫には　ルーペで判別できる程度の微粒の自然金が付着していた．

第3図　デマイヨの温泉．　先カンブリア系の石英片岩の割目から湧出している．　透明かつ無味無臭で　温度は 45°C 前後　村人は疲労回復剤や伝染病の薬として利用している．



第4図　デマイヨの温泉湧出孔の前の小川．　この川底で　含金石英脈の転石が発見された．

見込品位は数 10g/t らしいこの金鉱の転石は　中央構造帯の主要構成員である花崗岩と成因的に関係をもつ金鉱脈を起源としていることはまず間違いない.

金鉱の転石が発見された小川は　その規模や岸に茂る木の様子からみて　雨期にも大して増水しないようだ.

地形はほとんど平坦だし　小川の延長も大したことはない.　こうしたことを考えれば　この金鉱転石の起源を探すことは　この小川に沿っての転石探鉱や表土中の水銀の定量によって得られる水銀分散ハローなどによって　割合いに容易であろう.　鉱床露頭発見の手がかりを中央構造帯にまず求め　そして　その一助として温泉に注目したことは　幸にして　誤まりではなかった.
それは　目には見えないほどの微粒の金ではあったが　美しくしい光を放っていた.　これまで安らぐことのなかった胸の内も　これで　幾分救われたというものだ.

しかし　今は静かに潜んでいるのであろう金鉱脈については　一切分らないし　それを求め探すことは　時間的にゆとりもなく　また　それに必要な道具類をもたないこの調査行では無理である.　今後の調査行において注目すべき何かを発見できなかった時には　たとえ半日でも　ここへ戻って付近の調査をしょう　また　たとへそうすることができなかったとしても　いつか　誰かがきっとその仕事をしてくれることを期待して　その場を立去ることにした.

この転石の発見は確かに大きな喜びではあったが　私は　同行の村人にさえ　金鉱の存在を伝えなかった.

その主な理由は　このことをまずバンギの鉱山地質局長に報告した方がよいと判断したこと　および　このことが村人を必要以上に刺激してはならないと考えたことである.　この温泉水は　疲労や伝染病の特効薬として飲用されているということなので　ここを訪ずれる村人は少なくないだろうが　目には見えないほどの微粒の金なので　当分の間は　村人もその存在に気がつかないだろう.

第5図　デマイヨ部落付近の典型的なサバンナ風景.　後に小高く見えるのは　ディッシコ川に沿って回廊状に発達する密林.

石が素顔を見せないこの広大な大地で　探し求めていたほんの一かけらの石を発見できたことは確かに大きな喜びにはちがいなかったが　期待とそれを裏切られはしないかと思う気持で　温泉へ向ったことを思えば　むしろ　呆気なくさえあった.　デマイヨへ帰る時の足どりは　温泉へ向う折の重い足どりがまるで嘘のように　軽やかであった.　そして　この日の想い出に　何の変哲もない付近のたたずまいをかメラに納めた（第5図).

デマイヨで小休止した後　さらに南方のムボオウへ向い　デイッシコ川に沿って歩いてはみたが　放射能強度は思わしくなかった.　しかし　デイッシコ川の上流でまったく偶然に　ロポトを造っている現場を見ることができた.　マニオクの粉と水を入れたドラム缶を弱火で熱してアルコール蒸気を作り　それをパイプで水ガメに引いて冷やし　ブリキ製の細い樋から滴々と落ちるロポトを瓶に受ける簡単な装置だが　その現場では　3人の男と2人の女が働いていた.

1瓶100フランのロポトを造るにはかなりの時間を要するのだろうが　これで商売になるのだろうか.　樋から落ちる幾分薄黄色のロポトを小皿に受けて一口飲んでみたが　味はオウアンダゴの道路傍で女が売っていたものとまったく同じであった.　ロポトを造っているこの現場が道路からかなり離れた山中であることや　写真撮影を断わられたことから察すると　このロポトは密造されているのかもしれない.

1時25分　クランペルの宿舎に帰り着いた.　陽はもちろん高いが　ささやかな発見をしたことで　この早仕舞もきっと許してもらえるだろう.

ジュル爺さんに命令されたのだろう　宿舎の番人が宿舎から200mばかり離れているブランバロウ川から汲んできた水をバケツに1杯　部屋に運んでくれた.　赤道アフリカ地帯の川や池の水の中には恐ろしい病源菌が巣食っていることが多いので　生水を使用することは好ましいことではないのだが　大量の水を沸かす器もなければ燃料も十分ではないので　バンギを出発以来　生水で洗面し　口をゆすぎ　身体を洗っている.　生水に対する怖れがないと云へば嘘になるが　一向に病気にかからない故か　日一日と　水に対する警戒心はうすらいでいった.

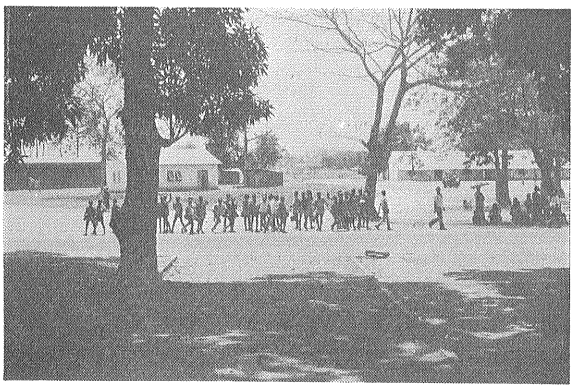
変りばえのしない昼食を終えて　玄関横のマンゴの木蔭に椅子を持ち出し　運転手と一緒に　トランジスターラジオから流れる音楽を聞きながら　前の通りをぼんやり眺めて夕暮を迎へることにした.

チャド共和国から来たらしい貨客混載の長距離バスが宿舎の前で停った(第6図).　ここで一休みするのだろう　多くもない乗客は　バスから降りると　思い思いの方向へ散って行った.　1個5フランの揚げパンを商っている少女の店に客が集まり　授業を終えた小学生は隊伍をくずさず　歌を合唱しながら帰って行く(第7図).市場帰りの女たちが　急に立止り　道の真ん中でおしゃべりをはじめた(第8図).　木蔭にでも入って話せばよさそうなものを　かんかん照りの中で　しかも　大きな荷物を頭に載せたままである.　買物包を頭に載せ　赤ん坊を横抱きにして足早に通り過ぎた女の後から　真紅のズボンにブルーのシャツ　椰子の葉で編んだ帽子をイキにかぶった若者がやって来た.　その次に姿を現わした娘と子供をおぶった女は　私たちに気付いて　わざわざ挨拶に来てくれた.　まったく　いろんな人が通るがその誰もが旧知の間柄といった感じだ.

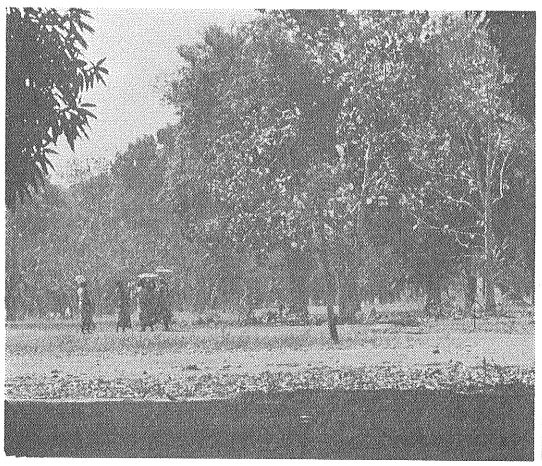
暑い盛りだというのに　ジャン・クロードが　すぐ近くで　焚火をはじめた.　そして間もなく　実に香ばしくて美味そうな臭がしてきた.　みると　アルミニウム製の平鍋にバターを溶かして　蟻をいためている.　出来上ったらしい.　ジャン・クロードは　その2～3匹をつまんで口にほうりこむと　「セビアーン」と云って皿ごと私に差出した(第9図).　「蜂の子と思へば何でもない」と　自分に云い聞かせながら　私もその蟻を食べてみた.　歯ざわりも味も蜂の子とまったく同じだ.蟻ということでいささか抵抗を感じないではないが　これは　アフリカのとくに内陸部に住む人たちにとっては貴重な蛋白源の一つである.

サバンナ地帯を旅していると　野焼して間もない所にまるで雨後の筍のように　小さな蟻塚が突出ているのを見かけたり（第10図）　時には　まるで古城のような形

第6図　クランペルの宿舎前に停った貨客混載の長距離バス.　片道2～3日がかりで走るバスがかなりある.



第7図　声を張りあげて歌いながら下校する生徒と街頭の「揚げパン」売り(右はし)　クランペルにて　後方左病院　右小学校



第8図　道路の真ん中で立話をする女たち　クランペルで

第9図　バターでいためたアリ　親と子が半々ぐらいで　これだけの値段が 100円　味は蜂の子のいためたのとそっくりで　蛋白源の一つとして珍重されている.

をした高さ２m以上もある蟻塚を見かけることがありその生命力のたくましさに驚かされるが　とてつもなく大きな蟻塚であっても　その中の蟻を捕えた形跡がないこともある．　こうしたことを考えると　日本で食用に供されている蜂の子が地蜂の子に限られているのと同じように　ごく限られた種類の蟻だけが食用にされているのかもしれない．　デコアの東方で見た蟻塚は　内部の蟻を捕えるためにあけられた穴が　ぽっかりと口をあけていた（第11図）．

コバ川の支流に想う

２月16日　中央構造帯の西縁部に位置するボンゴ部落付近の放射能強度測定を主目的として　７時30分に宿舎を出発した．　往復およそ 240km の調査である．

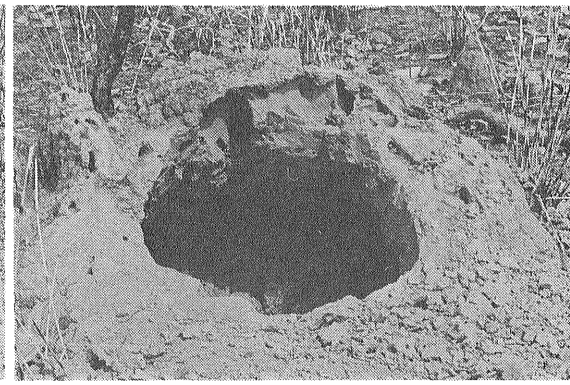
この付近の地質は珪岩および石英片岩を主とする変成岩類とこれらを貫く花崗岩によって構成されており　コバ川の一支流がこれらを傾斜方向に切って流れているので　うまくいけば　この川沿いで新鮮な露出と接触部がみられるはずである．

クランペルを出発してから１時間20分の道程は快適であった．　８時50分にボンゴ部落に着き　早速　調査をはじめた．　しかし　コバ川の支流は完全に涸渇して草木におおわれ　期待した露出も放射能異常も見出されなかった．　知り得たことといえば　朽ち果てた花崗岩のかけらと変成岩のかけらとによって　両者の境界を推定できたことだけだ．　部落からおよそ 2km 上流まで調査して部落へ引返し　小休止した後　部落の北部の調査をはじめた．　しかし　結果はまったく同じであった．

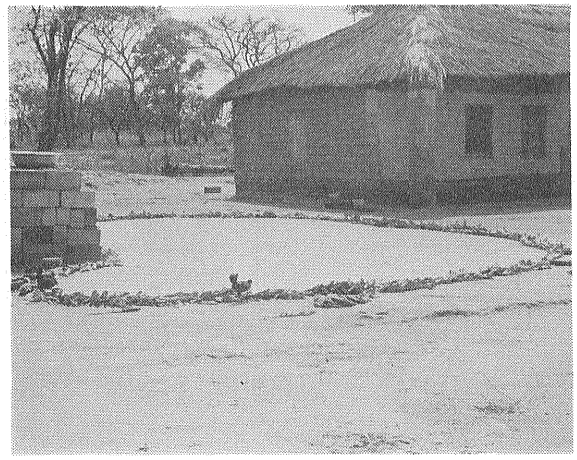
貴重なガソリンと労力とを完全に無駄にしたことにはちがいないが　こうしたことはとかくありがちだ．

部落のほぼ中央に建っている家の庭に　マニオクを乾してある（第12図）．　酸っぱい臭が鼻をつくその庭先で休憩している折　子供連れの婦人が通りかかった．　小さな包を一つ持っているだけだが　恐らく　買物の帰りなのだろう．　私たちの姿に気づいて　挨拶に来てくれ

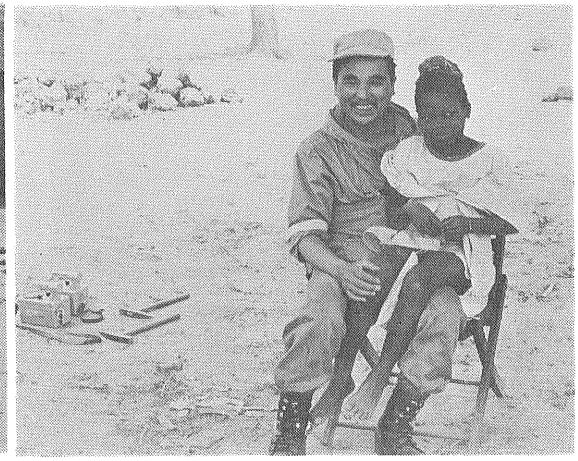
第10図　野焼きの直後にできた茸形のアリ塚．　こうした状景に接すると　生命力のたくましさをつくづく感じさせられる．



第11図　アリを捕えた後のアリ塚　直径約２mでラテライトで造られている．



第12図　ボンゴ部落で見た家とマニオクの乾燥風景．　風でマニオクが吹飛んだり　鶏が入らないようにして　まわりを葉のついた小枝で囲ってある．



第13図　ボンゴ部落で逢った５才の小女マリーナと記念撮影

た．　正装して日傘をさした婦人とこざっぱりとしたワンピースを着ている子供たちから想像すると　生活の苦労をあまりしらない家族らしい．　きっと　御主人が甲斐性者なのだろう．

プロポーションの美くしいその婦人は　手にしていたオレンジを　私たちに差出した．　ナイフを入れたとたんに　そのオレンジからは　流れるように果汁が出てきた．　こうした果実に恵まれない環境で生活してきた私は　その美味さに驚嘆し　がぜん　猛烈な食欲を覚えて少し買いたいと云ってみた．　母親の云い付けで　子供たちは　オレンジを買いに　今来た道を引返して行った．そして　それから10分ばかり過ぎた頃　子供たちは帰ってきた．　値段は１個１円　公害もなければ肥料もまったく使用されていない　自然の意のままに育った実に美味いオレンジであった．

子供たちは控えめでおとなしく　皆んなが可愛い顔をしている．　私は　一番小さいマリーナを抱いて　記念撮影をした(第13図)．　ふくよかな顔にぱっちりと開いた大きな瞳　肌の色こそ真黒ではあるが　もう10年近くも幼子を抱いていない私は　このマリーナに　とても口では云い表わせない愛ほしさを感じた．　撮影を終った時の「メルシイ」と云うマリーナのか細い声さえ　とかく忘れられがちな何かを思い出させるように　美しく響いてくる．　それにしても　この部落に　何故　ボンゴという名が付いているのだろう．　コバ川の支流が　この部落付近で分岐しているせいだろうか．　ボンゴとはサンゴ語では　ズボンという意味である．

ボンゴからの帰りの道は　暑い盛りのせいか　楽ではない．　人通りもまばらなデコアの町はひっそりとしてはいるが　道傍には　屋台店が並んでいる．　アラブ系の男が　小さな屋台の上にわずかばかりのジュースを並べて商売してはいるが　客は一向に来ず　のんびりと軒先の陽蔭で世間話に興じている(第14図)．　こんな商売で生計をたてているのだろうか．　１個１円のオレンジがあるというのに　まったく不思議なことだ．

夕食前の一時　サンダルをつっかけて散歩に出てみた．宿舎の前の道路を横切って　病院の横を通り　西へ進むと　突然　広大なススキの原が見えた．　日本でススキを見るのは秋なのに　どうしたことだろう．　ススキの原の遙か彼方に　うつそうと茂るマンゴの林に抱かれた数えるほどの民家が見える．　市場帰りの村人と子供が「ボンソアー・ムッシュー」と声をかけて　私を追い越して行った．　ススキの波を隔てて　道路からほど近い所に　学校が建っている(第15図)．　だが　学校とはいっても　自然木の柱の上に萱の屋根が乗っているだけのもので　鉄筋コンクリートや木造の学校とはちがって至って粗末なものだ．　教室といった特別の部屋もなければ廊下もなく　大屋根の下にあるものは　これを支えている曲りくねった柱と土間　そして　二岐の自然木を土間に埋め　その上に板を渡しただけの机と椅子だけである．

薄暮に包まれてひっそりと建っているその学校と内部の様子に見入りながら　喜々として学びそして遊ぶ子供たちの姿を思い浮べて　私は　深く考えさせられ　そして　恵まれた環境に育った一人として　なすべきことのあまりの多さに複雑なとまどいをさえ覚えた．　深い緑の中でさんさんとふりそそぐ太陽の光を一杯にあびて育ちつつあるこの国の子供たちには　一片のかげりもない．しかし　この子供たちがこれから先の成長の過程で　ま

第14図　デコアの街道傍のジュース売りと衣類売り　至ってのんびりしており　強い陽射しの中のジュースも　ゴザの上に丸められた衣類も　この土地ならではのものかもしれない．

第15図　ススキの原とマンゴの巨木との間からのぞくクランベルの小学校の萱葺きの屋根．

た　成人した後に　いわゆる外国の文化を吸収する時　そして　それを豊かな生活の大きな糧としょうとするとき　果して　そうした文化のもつ独特の毒性までも吸収しはしないだろうか．　世の中には　知らぬが故に心豊かなことがあり　知ったが故に苦悩の淵に身を投じなければならないことがある．　音もなく　闇がクランペルの町を包みかくした．　一日のメモを書き終えた後の私の脳裏には　どうしたことか　コバ川の涸れ果てた支流のたたずまいが　ありありと彫みこまれていた．

1965年に出版されたこの国の地勢図には　無数の河川が　はっきりと画かれている．　もちろん　それらの中には　乾期中には水の流れがないものもあろう．　しかし　今日歩いたコバ川の支流が草木におおわれ　しかも川底に枯枝や朽ち果てた葉が厚く積重なっていることからみれば　数カ月前に終った雨期に　相当の水の流れがあったとはとても思えない．　かつては人々の豊かな生活の場であった北部アフリカが　きびしい乾燥気候に見舞われて　今はサハラ砂漠と化している事実　また　アフリカ南部にまるで取残されたように拡がるカラハリ砂漠の存在　これらにみられる自然の大いなる業に目を向けるとき　そして　両砂漠にはさまれた湿潤地帯にみられるコバ川の支流のような涸渇を見るとき　この湿潤地帯もやがては乾ききった大地に変るのではなかろうかという恐ろしいほどの想像が私を虜にする．　生活の場を再たび追われて新な森を目ざすピグミー族　巨大な牙を持つ数百頭の象の群や美しいアンチロープたちは　緑濃い新天地を果して探し求めきれるだろうか　そこに辿り着く前に　飢と渇きとで死に絶えはしないだろうか　振り払おうとしても　そうした恐ろしい推理は　容易には消え去ろうとしない．

夜も更けてきた．　町へ出ていたプロスペクターの1人が　「グリバルに温泉がある」という情報を　聞いてきた．　明日の目的をその温泉に決めて　床に着く．

コ　ト　露　頭

2月17日の早朝　鉱徴地の発見を心中ひそかに期待しながら　グリバルへ向って出発した．　クランペルの町の東を限るブランバロウ川の岸では　もう賑やかに洗濯がはじまっている．　この川に架かる橋を渡ると　グリバルまでは一本道である．　地勢図上に黄色い線で示されている三級国道には　ボッサンゴアとバタンガフオとの間で　散々な目にあったが　この橋を渡ってから後のグリバルへの道も　その例に洩れず　路面の荒れようは大変なものだ．　1時間を費やして32kmを走り　グリバルの部落に着いた．　部落のほぼ中央に車を停めると暇で身体をもてあましているらしい連中がやって来た．その先頭は部落長の老人である．　部落長であることを示す金色の大きなメダルを胸につけているその老人に温泉の所在地を尋ねてみた．　だが　その老人からは「温泉は　この部落にはありませんが　35km ばかり東のングイヤにはあります」という　空しい言葉が返ってきた．　まさに　出鼻をくじかれた感じであり．　嘘の五三八というが　その老人の言葉を信用して　ングイヤへ行ってみることにした．

一かたまりの家がひっそりと建っているコド部落を過ぎ　グリバルから26km付近の左手に小高い丘がみえその頂上から麓へかけて　白い岩盤が光っている．　ペグマタイトがある地域ではないが　新鮮な露岩を見ることがほとんどないので　丘の頂まで登ってみることにした．　その岩盤は　やはりペグマタイトなどではなく板ガラスの原料ぐらいにはなりそうな真白の石英片岩だった．　走向 N70°W　傾斜 20°SW　放射能強度は3 μR/h である．　丘の頂から北方を見ると　コド川の向うに　黒々とした大密林が横たわっている．　まさにアフリカそのものである．　あまりの雄大さと美しさに魅せられて　カメラのレンズを望遠に換えたとたんに　無数の小蠅がまつわりつきだした．　レンズにしがみつく蠅を片手で追払いながらようやくシャッタを押したとたんに　その1匹が目にとびこんだ．　無性に腹がたって素早く目を閉じた．　そして　その蠅は実に呆気なく昇天した．　後で目薬をさしておけば安心だ．

ふだんは神経質すぎるといわれるほどの清潔家である私は　蠅の多いことでは有名？なアラビア半島での長い生活で　蠅との喧嘩には滅法なれているので　少々の蠅にまつわりつかれてもびくともしないようになっている．何しろ　魚の残骸を餌に　一度に一升瓶一杯ぐらいの蠅を退治したことが何度もある私だ．

道は狭くなり　巨木とそれにからみつく蔦が光を遮ぎるようになった．　どうやら密林地帯へ入ったらしくまるでトンネルの中を通っているような感じである．

30mばかり前方を　獣が素早く横切った．　この国へ来てから河馬以外にはじめて見た動物だけに　それが何なのか　私にはまったく分らない．　運転手は20mばかり徐行してから　車を停めた．　上乗りしていた若い猟師が　足音をしのばせて　密林へ走った．　私は　いくら経験豊富な猟師でもあのすばしっこい小動物を仕止めることは不可能だと　安心していた．　猟師が密林へ姿を隠してから5分もたたないうちに　銃声が轟いた．人夫の一人がジャングル刀を片手に密林へ走り　銃声が

した付近の巨木の高い枝で　子猿が騒ぎだした．　間もなく　人夫が　血にまみれた猿を引きずって　密林から出てきた．

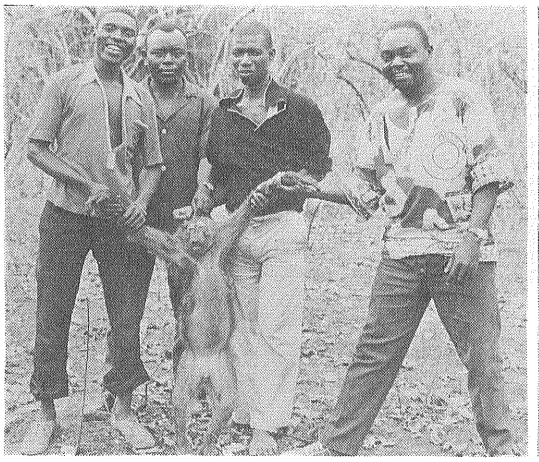
息絶える直前のひきつけを起しているその猿は　人夫が振りかざした脳天への一撃をうけて　瞬時に果てた（第16図）．　猟師が帰ってこないところをみると　彼は次の狙いを子猿につけているにちがいない．　私はたまりかねて　よろけたふりをして　肘でクラクションを押した．　横に居た運転手が不服そうな顔をしたので　いささかうしろめたさを感じはしたが　子猿たちが無事に逃げ去ったことを知った安心感がそれを打消した．　猟師が　がっかりした表情で　姿を現わした．　恐らく猟師は　異国の人の目の前で　プロとしての腕前を十分に発揮できなかったことを悔しく思ったのだろう．　獣を仕止めることは彼等にとって欠くことができないことだし　それはまた　この国の奥地で生活する私にとっても同じことだ．　しかし　今の私には　生ある獣を己の手で殺して食うだけの勇気はない．　まして相手は霊長類である．　グリバルからングイヤまでの距離は 27km であった．　部落の東の端で車を止めると　早速　多勢の村人が集ってきた．　この部落に限ったことではないが車を停める度に　暇をもてあましていると思える若者が多勢集って来るのは不思儀だ．

滅多に接することのない異国の民や便利な物や食物など　いわゆる文明の一端に触れ　そして　それから何かを得ようとする努力の一つの表われがそうした行動であるならば分らぬではないが　どうもそればかりではなさそうである．　だからといって　真の独立国を目ざすこの国の若者が　涼しい軒先やマンゴの木蔭で四方山話にふけって一日を過しているとも思えない．　広大で未開のこの大地には　現在の労働力ではとても足りない働く場があると思えるのだが　やはり　現状では　若い力をもてあまさざるをえない程度の仕事量しかないのかもしれない．　しかし　もし私がこの国の民の一人であるならば　眼前に拡がる無限の緑野を見て　手をこまねいてはいないだろう．　だが　冷静に考えてみれば　そうしたことを考えること自体が　あまりにも高度成長を遂げた機械化文明の中で生きざるを得ない者の　生れそしてすべてをさらけ出して果ててゆく大いなる自然の息づきに対するノスタルジアの表われの一つかもしれない．

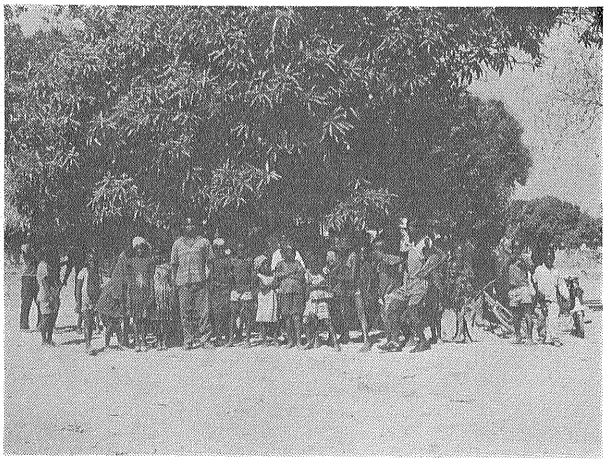
大人たちとは別に　子供が群をなして集って来た（第17図）．　きちんとした服を着ている子供も居るが　中には　破れた服というよりは布切れと云った方がよさそうな　かなりひどい格好の子供も居る．

しかし　裸同然の子供だけが仲間はずれになるわけではなく　誰もが　一様に天真爛漫であり　仲間である．

必要以上に物を粗末にするのが当り前のようになっているいわゆる消費社会の気どった人からみれば　この子供たちの姿を見て　あるいは　可哀相だと思い　その親を批判するかもしれない．　確かに　子供たちも親も良い着物　美味い食物　そして富に対する欲望や願望をもっているには違いなかろうが　しかし　私には　そうしたものがままにならないからといって自分を卑下したり悲観したり　死を思ったりしないところに　彼らの強さがあり　劣等感や敗北感でとかく身を責めて絶望に陥入りがちな極度の消費社会に生きる人との違いがあるように思える．　利発そうな若者が「2km ばかりの所に温泉があるから　案内しましょう」と　云ってくれた．
綿の収獲はすっかり終ったらしく　広い畠には人影もな



第16図　ングイヤへ向う途中で仕止めた猿．　人物は左からジャン・クロード　運転手のレイモンド　人夫　プロスペクターのアナトール



第17図．　ングイヤの子供たち　「ボロ布」としかいいようのないようなズボンやシャツを着ていても　まったく卑屈なところがない　愛すべき性格の子供たちである．

い．　畠を通り　密生する萱をかきわけて　南へ歩いた（第18図）．　部落を出てから15分ばかり歩いてフオ川の水の涸れた支流に着いた．　スイッチを入れたままのシンチレーションカウンターの指針が　この支流に入ったとたんに　100μR/hを指した．　完全に放射能異常だ．

「異常よとぎれるな」と　祈る気持で測定していくうちに　フオ川の本流へ出た．　そしてそこは　密林の真只中であった（第19図）．

フオ川の水の流れは素晴らしく美しかった．　この国へきてから　はじめて見た透明な水の流れの底には　色とりどりの丸まった小石に身を寄せて　秋の訪ずれを思わせるような黄褐色の木の葉が潜んでいる．　水の流れにそーっと手を入れてみた．　温かい．　温泉の湧出孔は3個所にあり　湯の温度は50°C前後　湧出量は100t/日ぐらいらしいが　この湯を混えたフオ川の水量は　100t/分以上はある．　飲料水さえ十分に確保できずに困っている人たちが　何故　この清浄な水を利用しようとしないのだろうか．　ここからングイヤ部落まではおよそ1.5km　しかない．　パイプ1本で皆がきれいな水をふんだんに使用できるというのに　私には　この水が無駄に捨てられている理由が分らない．　川岸に点々と露出している絹雲母石英片岩の肌をなめるようにして測定していく．「1,200」と云う同行者の一きわ高い声が　密林を渡った．

1,000μR/h以上の放射能異常の発見をひそかにねらっていた私たちは　今　密林の中でそれをとらえた．　調査のねらいが適中したこと　そして　この発見によってこの国の鉱物資源の把握と今後の探査に役立つことができる喜びに浸ったのは　それから間もなくであった．

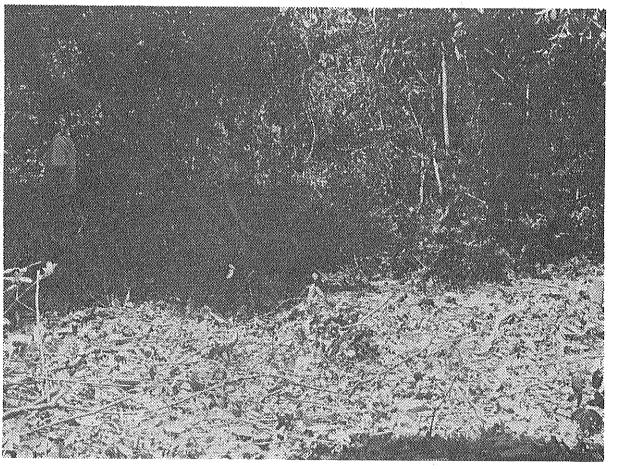
群をなす蜂に刺された首筋の激痛も忘れて　頭から湯をかぶり　汗とほこりにまみれた身体を洗った．　バンギを出発して以来16日ぶりに使う湯である．　さっぱりした頬をなぶって　そよ風が通りすぎていった．

ングイヤから同行してくれた6人の青年に　一番掘りやすそうな異常地点のトレンチングを頼んで　クランペルへ引揚げることにした．　お礼に差出した6枚の100フラン硬貨を手にした彼らは嬉しそうだった．　もっとも　一日125フランの労賃からみれば　これは破格の謝礼である．　私たちは　はじめて得た大きな喜びを記念して　2人のイニシアルをとって　この異常地にコト（KOTO）露頭と命名した．　私たち2人がたとへこの国の人たちに忘れられたとしても　この名前だけは永久に残るだろう．　また　是非そうあって欲しい．

燃えるような夕陽がゆったりと身を沈め　冷ややかな夜のとばりがいつの間にかしのび寄ってきた．　蝙蝠も既に姿をかくし　金星の美しい輝やきは　一きわ美しい．いよいよ　宇宙の夜の盛装である．　異常地発見を喜びその発見と日程変更の電報を鉱山地質局長のバクポーマ氏に打った安心感もあって　まったく変りばえのしない夕食なのに　今夜の食事は美味しい．　「ムビ　イエ　アイエケテイ　コビ　テイ　モウレンギ　テイ　ワリ　テイ　コーノ　ケーケラケ（明日　河馬の娘の料理を食いたいよ）」という私の冗談を受けて　食後の片付けをしているジユル爺さんが　「コビ　テイ　モウレンギ　テイ　ワリ　テイ　バンマラ（ライオンの娘の料理をね）」と云って　笑いこけた．

夕食後　異常地発見の祝杯をあげるため　全員で　ビストロへ行く．　既に顔なじみの未婚のマダムが　こぼれんばかりの愛嬌を振まいて　迎えてくれた．　クラン

第18図　ングイヤの放射能異常地がある密林の入口付近に密生する萱．　この萱はキャンプ中に焼き払われた．人夫が担いでいるのは　アイスボックスだが中に入っているのは　ビールとエビアンだけで氷は入って



第19図　伐採前のングイヤのキャンプ地の密林

ペルで唯一のこのビストロは今夜もすごい人だ．　付近で叩いているはずのタムタムの音がまったく聞きとれないほどにボリュームを上げたスピーカーから流れる音楽に合わせて　若者も老人も　巧みな足さばきとボディアクションで踊っている．

ボディアクションは一人一人異なってはいるが　足の運びは音楽にぴったりと合っている．　この国の人たちは　どうやら　一人残らず　天性の音楽家であり舞踊家でもあるらしい．　羨やましいことだ．　だが　決して早い時刻ではないのに　ビストロの囲いの隙間から内部を凝視している子供たちがやけに多いのが気になる．しかし　電燈もなければランプも満足にない家にいても本さえ読めないこの子供たちを　一概に責める気にはなれない．　これから先のこの国を担うこの子供たちのために　一日も早く　せめて明るい光と清らかな水とを与えてやりたいと考えているうちに　眼前に繰り広げられているにちがいない喧騒が　何故か　遠い世界での出来事のように思えてきた．

9時　私は　一足先に宿舎へ帰り OTCA への報告を書いた．　静まりかえった真暗な宿舎の中にポツンと灯るランプのあかり　その弱々しい灯を頼りにペンを走らせながら　私には　この明暗と灯を頼る自分の姿が　今までの焦りに似た気持と異常地発見の喜びとの相交々する胸の中に相通ずるように思えてきた．

11時を過ぎた．　ベッドに身を横たえてはみたものの様々のことを想い浮かべて　中々寝つけない．　恐ろしいほどの静けさに腕時計を見ると　夜光塗料の青白い光が午前2時10分を指している．　ドアをそーっと開けて表へ出てみた．　北斗七星は　すでに　そのたたずまいを大きく変えている．　冷んやりとした外気　今にもしのつくように降ってきそうな大粒の無数の星　静寂と闇天空を見つめる私の目には　いつしか　涙がとめどもなくあふれていた．

小虫とパンプリモス

18日に再たびングイヤの異常地を訪ずれて大まかな地形図の作成と放射能強度測定とを行なった私たちは　放射能異常がかなり広がりそうなこと　クランペルからここまでの時間やガソリンの消費などを考えて　ここで4日間のキャンプをすることにし　同行の部落民に　テントを設営するための200坪ばかりの範囲の伐採と草と灌木の焼き払い　トイレをつくることを頼んで　クランペルへ帰った．

19日土曜日　チャーノツカイトの新鮮な露出を見たことのない私たちは　軽いトレーニングを兼ねて　宿舎のベランダからよく見えるチャーノツカイトの丘へ行ってみることにした．　宿舎から 6km ばかり離れているゴウボタ部落が　この丘への登り口である．　部落の中央部の木蔭に車を停めて　丘へ向って歩き出して間もなく右の手首に　異様な痛みを感じた．　見ると　ブヨぐらいの大きさの虫が喰いついている．　慌てて叩き殺しよく見ると　腹に薄黄色と薄墨色の横縞模様があり　胴体も羽根もふつうの蠅やブヨよりは幾分長い．　この国へ来る前に若干調べてきたツエツエ蠅とまったく同じだ．

この虫が　ブヨだったら傷口がやがて痒くなるだけで大したことはないが　もし　ツエツエ蠅であれば　最悪のばあいは　こんこんと眠りつづけた末に命をとられることになる．　しかし　予防薬も治療薬もない現在ではまったく手のうちようがない．　ツエツエ蠅による人や家畜の死亡率が科学が高度に発達した現在もなお高いことを或程度知っていた私は　背筋が寒くなるような恐ろしさと絶望感とに襲われた．　だが　これから自分にできることは　最後までそれに抵抗して何とか生き延びようとする気力を失なわないことだけだ．　もしこれがツエツエ蠅であるならば　或程度時間がたてば　傷口のまわりは真白に変色し　そして　はっきりとした自覚症状がでるはずである．　それまでは忘れることだ．

丘の頂は　宿舎からは平に見えたが　実際はかなり起伏していた．　この丘を形成しているチャーノッカイトはほとんど片麻岩であるが　岩相の変化は実に目まぐるしいばかりである．

日本では耳なれないチャーノツカイトは先カンブリア時代特有の岩石であり　その名も昔はなかった．

インドの大都会カルカッタを建設し　1693年にこの世を去った Job Charnock の墓石がこの岩石で造られていることから　1900年　T. H. Holland が　故人の名に因んで　チャーノツカイトと名付けた岩石は　本来　石英とマイクロパーサイトを主組成鉱物とし　紫蘇輝石と灰曹長石とを含む　高変成度のグラニユライト相のメンバーの一つである　紫蘇輝石花崗岩に対する呼称であるが近年は　塩基性～超塩基性岩を主とするチャーノツカイト統の岩石に対しても用いられるようになっている．

この地域に広く分布しているチャーノツカイトは　構成物質の相違によって　酸性相・中性相・塩基性相・周縁相・同伴塩基性岩類の5相に区分されており　この丘には　主として　中性相に属する黒雲母片岩が分布している．　丘の頂からの眺めは素晴らしい(第20図)．　広大なサバンナの所々に深く茂るマンゴ　そして　そのマ

ンゴの巨木に寄り添って建つ家　そのたたずまいは別荘地を想わせるようだ．　町の南端部近くに建っている高い塔が教会であることを　同行のアナトールが教えてくれた．　宿舎で教会の鐘の音を何度も聞いたことがあるが　それはこの教会から聞こえてきたのだろう．

見渡す限り緑一色のクランペルの町とその周辺　マンゴの木と椰子の木が見えるほかには　とりたてていうほどの畠もない．　ブランバロウ川は豊かな水を湛えているというのに　耕地がきわめて少ないのはどうしたことだろう．　いつの間に来たのか　小学生がすぐ近くに立っている．　皆かしこまった面持だが　「ナンド　ドウテイ　テネ（岩に腰かけろよ）」と云いながら彼等に笑顔を向けた私を見て　子供たちの真白な歯がこぼれた．先生がバンギへ行って留守なので　今日は授業がないらしい．　この付近の子供たちは　折にふれてこの丘に登り　風雪に耐えた大きな岩盤に立って雄大な景色を眺めその上に寝転んでは空の青さを見つめて　きっと　自分の未来像を思い浮べるのにちがいない．　一点の汚れもない空の青さと緑と心　遠い昔から自然と共に生きてきたこの国の子供たちの瞳は美くしく輝いていた．

彼等のたくましく成長したたのもしい姿と国造りに励む尊い姿を想い浮べながら　丘の斜面をゆっくりと降りはじめた．

先ほどまでは誰も居なかった広く平な岩肌に　女がマニオクを拡げている（第21図）．

「バラオ」

「バラオ　ミンギ」

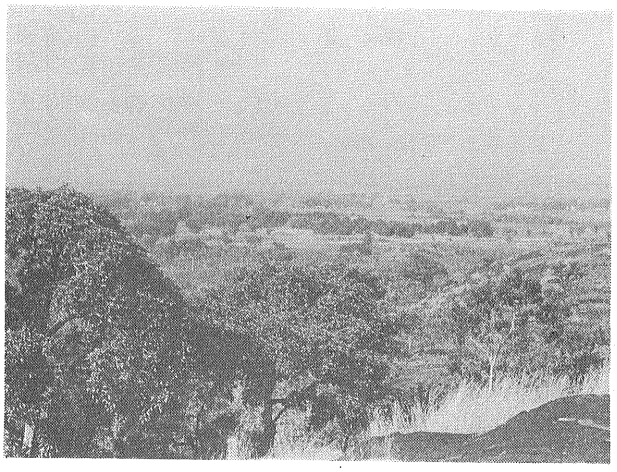
「モウ　イイキ　ンジョニイ？」

「メルシイ　ミンギイ」

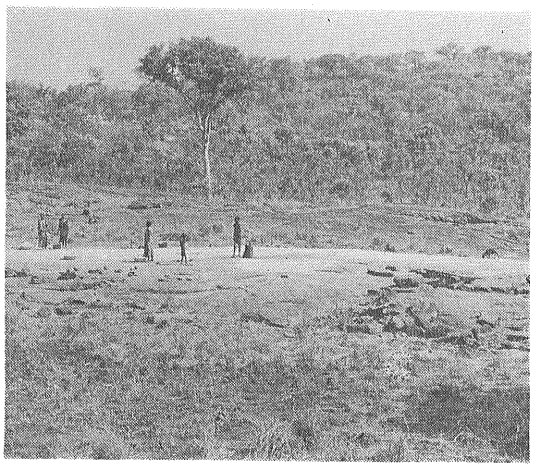
バイヤ族の女性よりも大柄な彼女たちは　一斉にふり返って　私の下手なサンゴ語に答えてくれた．　彼女たちと打とけるためとサンゴ語の勉強のために　「ムビイエ　アイエケテイ　マニオク　ダペレ　ケーケラケ（明日の朝マニオクを食べたいんだが）」と　云ってみた．うまく通じたこの間に「オッカー（OK）」と答えて大笑いする彼女たちの大仰な身振りを見て　私は　思わず吹き出してしまった．　それは　オッカーの日本語の意味をとっさに思い出したからだ．

日本のある著名な学者が　その著書に　「南方の民族の言葉と日本語との間には完全に一致する言葉が幾つもある．　例えば　鍛治屋の火床をホドというが　南方でもホドという言葉があり　それは穴を意味する．　従って　日本人は南方系の民族である」と　述べているのを読んだことがある．

要するに　同じ意味の同じ言葉を用いる民族は本来同一民族であるということらしい．　もっとも　こうした見方には　言葉のほかに　顔や身体つきの特徴などが似ているということも　大事な要素として含まれているにちがいない．　しかし　言葉というものは　たとえ異民族であっても　それら相互間の接触が多ければ多いほど従来の言葉に新らしい言葉が加わり　そして　長い年月の中で従来用いられてきた言葉とまったく同様に位置づけられがちな性質のものであるから　同じ意味をもつ同じ言葉を用いるということだけでは同一民族であるという確たる証拠にはならない．　例えば　サンゴ語としてふだん用いられている「メルシイ」はフランス語のそれとまったく同じ発音であり　まったく同じ意味をもっている．　このことは　フランスの影響を受ける以前のサンゴ語では　メルシイで代表されるような　感謝の意を



第20図　ゴウボタ部落近くのチャーノッカイトの丘から見たクランペルの町．右下のチャーノッカイトの一部に白く線状に見えるのは　腸詰め構造の石英脈．



第21図　ゴウボタ部落の近くにあるチャーノッカイトの丘でマニオクを乾す女たち．

表わす言葉がなかったことを暗示こそすれ　フランス人とサンゴ語を国語とする民族とが同一民族であることを証明する証拠にはならない．　言葉というものは　火とともに　人間が生きのびてきたもっとも大きな要因の一つであり　大変難かしいものである．　横道にそれたついでに　言葉に関係のある小話を述べてみよう．

インテリのアラビア人とアラビア語には絶対の自信をもっている（とふだん自慢している）日本人が　とある茶店で話していた．

「日本は　戦争を放棄したと宣言したのに　何故　ゲイシャをおいているのか」

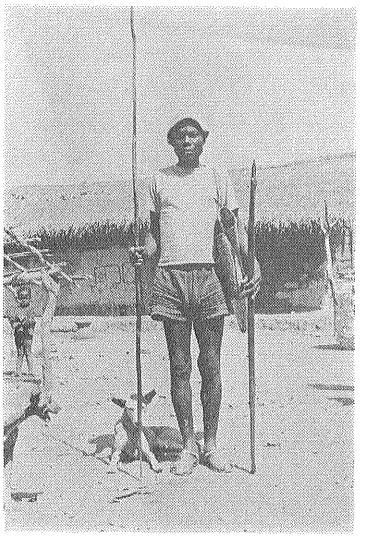
「戦争放棄を宣言したからといって　ゲイシャをおいて悪いことはない」

「そんなことはない．　武力を必要としない国に　ゲイシャは必要ではない」

「武力を必要としなくても　君たち外国人は　日本に観光旅行にくると　ゲイシャをみたがるではないか．これも必要なものの一つだよ」

この２人のゲイシャ論議は　結局　結論を得なかった．それは当りまえで　日本人のいったゲイシャは芸者であり　アラビア人の云ったゲイシャは軍隊である．

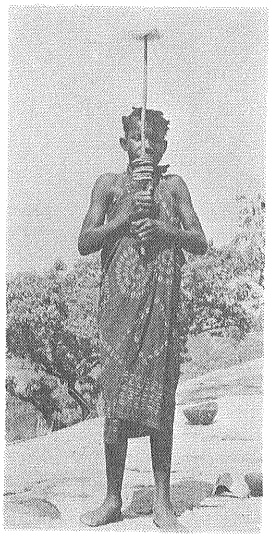
日本のある会社の重役がカイロに観光旅行に来た．大胆といおうか　無茶といおうか　英語もアラビア語も分らなければ　通訳代りのお伴を連れているわけではなく　しかも　予約したホテルの名を書いたメモを忘れて来た．　どうやら入国手続を済ませて　憧れのエジプトに第１歩を印した．



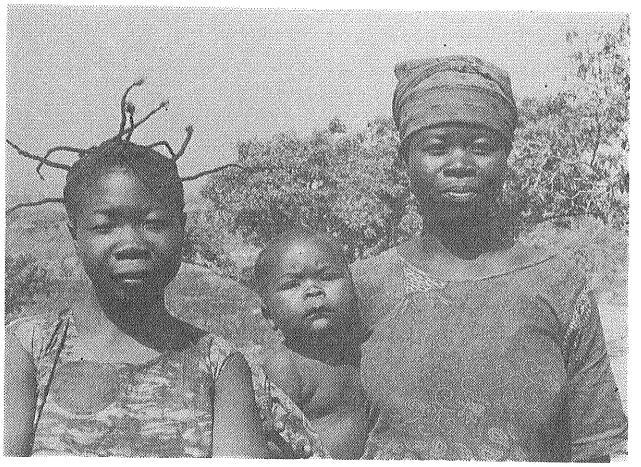
第24図
ゴウボタ部落の男．
左手に持っているのは槍と弓（槍の蔭になって見えない）　肩にかけているのは矢を入れる籠　猟をする場合獲物によって矢の大きさや形が違い　大型動物をねらうときには矢に毒を塗る　田舎道を歩いたり野良仕事をする男たちは　例外なく常にこのような弓矢と槍を持っている．

並んでいるタクシーに乗ればホテルへ連れていってもらえるだろうと考えて　ともかく　一番前のタクシーに乗りこんだ．　そして　運転手に向って　「おい　旅館だ」と　日本語で云った．　やがて　タクシーは　一見横柄なこの日本人客を乗せて　ナイル川に近いあるホテルへ連れていった．　エジプト旅行から帰国したこの御仁は　会社内での旅行談の中で　「カイロには　日本語を話すタクシーの運転手が居る」と　語り　話を聞いていた人たちは　「日本語熱はエジプトにもついに及んだか．　日本も大したものだ」と　感心したそうである．

しかし　タクシーの運転手が日本語を知っていたわけではなく　ホテルのことを　アラビア半島地域の方言でフンドックといい　エジプト方言でルカンダと云うので運転手に云った一言がちゃんと通じたというのが真相で



第22図
楽器を持つゴウボタ部落の少女．　この楽器は手製で　ヒョータンを直径10cm大の円板状にして　その中心に穴をあけて木枝に通し手許近くを紐でとめ　上端にヤシのセンイで作った飾がつけてある．踊るときに　この棒を垂直に強く動かすと　ヒョータンがぶつかる時に鋭い金属音がでる．　この少女が持っているのを譲ってくれるよう頼んでみたが　「これは母親から譲られたものだから譲れない」と断わられた．　代りに少女手製のものを100円で譲ってもらった．



第23図
ゴウボタ部落近くで逢った親子．　左端の少女は15才　一見短かそうなちぢれ毛も丹念に伸ばして紐できつく巻くとこの長さになる．

ある．　この御仁は　自分ではまったく分らずに　エジプト方言のアラビア語を話したわけだが　運転手は　きっと　この御仁に接して　「いささか発音は悪いが　エジプト方言のアラビア語を話す日本人」と　みたことだろう．　サンゴ語の　「オッカー」が英語の「ＯＫ」に似ていることや　意味はまったく異なるが　日本語の「オッカー」に発音がそっくりなことから　とんだ横道にそれてしまった．　しかし　未知の国のたたずまい　人々風習　言葉などを　自分の国のそれらとくらべてみるのも　あながち無駄ではない．

マニオクを乾す女たち　楽器を持つ少女（第22図）親子（第23図）　弓矢と槍を持つ男（第24図）をカメラに納めて宿舎へ向った．

間もなく夕暮を迎えようとする頃　40才を過ぎているらしい一人の女性が　２つの籠に20個ばかりのパンプリモス（グレープフルーツ）を入れて　私たちの宿舎を訪ずれた．　聞けば　マニオクを乾していた女性が　写真をとってもらったお礼として　この女性にことずけたらしい．　夏密柑よりははるかに大きなパンプリモスを持って　6km余の道をわざわざ来てくれた女性とことずけた女性の律儀さと　あたたかい気持が尊く　とても嬉しかった．

気にすまいとは思っても気にしないではいられない手首の痛みが　次第に　激しくなっていく．　ほんの気休めにすぎないかもしれないが　消毒ということもあって傷口に　消毒兼用の傷薬をたっぷりとつけた．　このまま無事に済むか　あるいは　この傷が命とりになるかまったく分らない．　今日はじめて出逢った女性の優しい心づかいで得た大きな喜びと不安な気持とにゆさぶられて　今日も眠れぬ夜を迎えた．

ングイヤのキャンプ

いつもよりは遅くまで寝て　インスタントラーメンで迎えた日曜の朝　教会からの鐘の音が　さわやかに　クランペルの町を渡ってゆく．　善男善女が　美くしくめかしこんで　教会へ向っている．　かつてはアニミストだけであったにちがいないこの国の宗教別人口比は　最近では　急速に変りつつあり　いわゆるキリスト教徒が増えて　アニミストは減っている．　宇宙のすべてが魂をもっていると見るアニミストからキリスト教徒への改宗の決定的原因は何だろうか．　私は　その底流に　豊かな自然に恵まれてはいるものの貧しさを余儀なくされている人の精神的弱さ　そして　人間の非力さをみる．夕暮を迎えた．　そして　相変らず痛んでいた右手首はついに　傷口を中心に直径 1cm　ぐらいが　真白に変色した．　あの小さな虫は　もうまぎれもなく　ツエツエ蠅だ．

夕食後　私は　何通かのメモを書きはじめた．　そして　「1972年２月21日午前２時　中央アフリカ共和国ケモグリビンギ県クランペル郡クランペル国営宿舎にて」で終る所々にインクがにじむそのメモを読み返しながらもの想いに耽った．

あまり眠れないまま夜明けを迎えた．　ングイヤでキャンプするための荷物の積込みが　６時過ぎにははじまった．　わずか数日間のキャンプではあるが　２台の車には　隙間がないほど荷物が積込まれた．

ングイヤの部落に着くと同時に　村長さんをはじめ多勢の部落民がやってきた．　そして　男たちは全員人夫として雇われることを　希望した．　しかし　必要な人夫はせいぜい10人である．　一列に並ぶ男たちのうち先頭から５名を人夫とし　初日に温泉へ案内してくれた男を人夫頭にすることが決った．

これまで２日間はここから現地まで歩いて行ったが今日は荷物が多いので現地の近くまで車を乗入れることにした．　倒木を取除き　灌木を切り倒しながら進むのは容易ではないが　部落総出で手伝ってくれるので　車の進み具合も順調である．

キャンプ予定地の密林の木は　巨木を除いて　１本残らず切り倒され　草は焼かれて　この前来た時とはうって変り　そこには　強烈な光があった(第25図)．　フオ川を渡って 100m ばかりの小高い丘には　予想以上に立派なトイレも出来あがっていた．　水はふんだんにあるし　キャンプ場としては申し分ないが　無数の蜂だけは気に入らない．

後からついてきた　60人ばかりの部落の人は　東洋人も珍しければ　持物や食物にも興味をもっているらしい．それにしても　このような騒ぎは　この人たちにとってははじめてのことかもしれない．

荷物の運搬やテントの設営が終るまで　村長さんと雑談をした．　すばらしい体軀の村長さんは　延長 30km 以上にわたるグリバル・パミア村の責任者だけに　いろんな面に秀でているのであろう　ヨーロッパ視察団の一員として　オーストリアをはじめ各国を旅行したことがあるそうだ．　その旅行の途中で日本製の腕時計を買ったが　ガラスが割れ　針がとれて動かなくなったので日本で修理して送って欲しいと　私に　そのこわれた時計を差出した．　みると　確かに日本製の時計である．

しかし　これから１カ月余りの旅行中に紛失しては大変だし　またその上　日本へ持帰ってから修理・分解掃

除をして送り返すとなると　気苦労もある．　あまり乗気ではないが　その頼みを引受けた．　そのためにかなりの出費やわずらわしさを余儀なくされたとしても　新らしく生れ代ったこの時計が　村長さんのたくましい腕で　正確に時を刻んでくれれば満足だ．

美くしい化粧函に納められた時計が村長さんの手許に届いた時　また　その腕に光る時計を見た時　村人たちは　きっと　この時計と私たちを通して　日本人の心を知ってくれるだろう．

キャンプするには絶好の場所だと思っていたここには豹もいれば毒蛇もいると村長さんに聞かされて　日が暮れてからは川向うのトイレへは絶対に行くまいと決めた．午前7時　6人の若者が　ジャングル刀と鍬を持って陽気にやって来た．　作業がはじまり　木を切り倒す音や土を掘る音に混って　無数の鳥の声が景気よく聞こえてくる．　第1日目の予定の作業は定刻に終った．

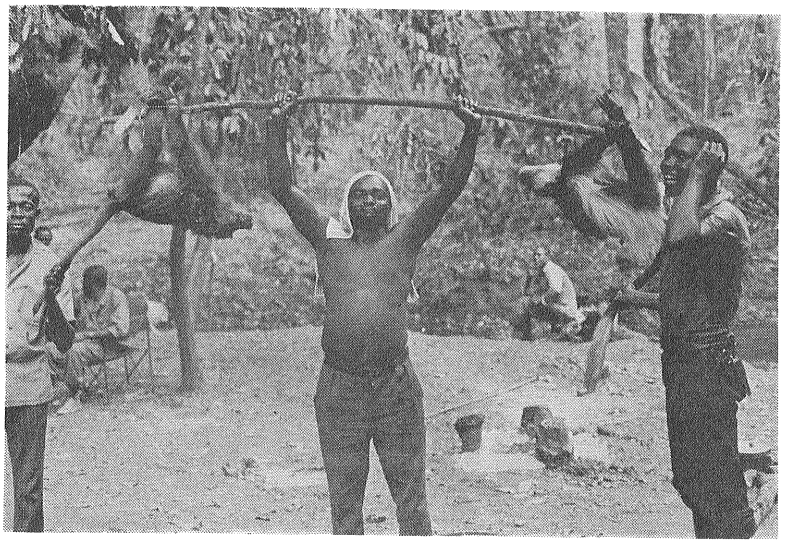
2日目の朝も　いつもと変らず　静かに明けた．　作業を開始してからおよそ1時間半後の午前9時　突然目の前が真暗になって　倒れそうになった．　9時半頃には　油汗がべっとりと頬をぬらし　地面に腰をおろしているのがやっとで　ハンマーを振る力は既に失せ　鉛筆を握る手はふるえてまったく字が書けなくなってきた．断続的に意識が薄れる時間が長くなってゆく中で　がまんにがまんを重ねていたが　遂に耐えきれなくなってテントへ戻った．

そして　アノラックを着たまま　蒸風呂のようなテントの中で　完全に意識を断たれた．

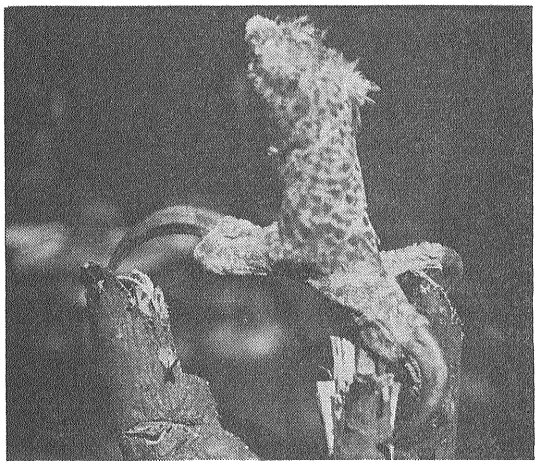
夜遅くなって冷えこんできたせいか　ふと　意識をとり戻した．　汗は　アノラックをも通して　下に敷いていた寝袋にまでしみていた．　今朝はなかったエビアンの瓶が　ベッドの横に置いてある．　ジュル爺さんが飲ませてくれた残りらしいが　いつ飲ませてもらったのか覚えてはいない．　気分はいくらかよくなったものの全身の力が抜け　今度は　猛烈な下痢がはじまった．熱もある．　テントから食事の場までは30mばかりしか離れていないが　足は思うように動かず　まるで果しのない道を辿る思いであった．

食欲はまったくなかったが　同僚たちにすすめられてスープをようやく飲み干した．　私の身を案じてくれていた同僚たちは　私を　明日の朝クランペルの病院へ運ぶことを相談していたらしい．　しかし　既に意識を取戻していた私はこのキャンプにとどまることを決めた．この数日　いささか睡眠不足であったことは確かであるが　かりに徹夜をしても平気なふだんの自分からみればこの変調は解せない．

皆寝こんだらしい．　か細いランプの灯　暗い密林の夜更けに　たった一人で起きている私を脅すように　異様な声で鳥が啼く．　気味が悪いというよりは怖い．腹痛と10分おきぐらいに襲ってくる下痢に悩まされ　何が飛出してくるか予想もつかない密林の中に足繁く通う時の恐怖心に身を固くしながら　悶々としているうちに朝を迎えた．　だが　失せ果てた力は戻らず　下痢も治まらず　おまけに　痔が悪くなって　用を足す度に涙が出るようになった．　そして　川へ行くことさえ重荷に



第25図
ングイヤのキャンプ近くで獲えた猿．　右側の猿は白と黒の毛足の長い美しい猿で　毛皮は敷物として最適である．　この写真は第19図とまったく同じ場所を同じ位置から撮影したもので伐採して下を焼き払った後の状態を示している．



第26図　ングイヤのキャンプ近くの密林で射落した鷲の足．　羽根を広げると2m以上もあったが　これぐらいになると　子供をさらうこともあるそうだ．

なって　とても仕事をするどころではなくなった．　いかなることが起っても　いかに苦しくとも　パトロンたるものはそれを表情に出すべきではないかもしれない．密林の遙か遠くへ調査に出かけた同僚の大変な苦労を思い　吹き出る汗を拭おうともせずに働き続ける若者の姿を見ているうちに　申しわけなさと情けなさとで　身を隠したくなった．

午前11時　作業服に着換える力もなく　私は　パジャマ姿にゴムゾーリを履いて　シンチレーションカウンターを肩にかけ　ハンマーとフイールドノートを持って　フオ川へ入って行った．

そうした私の姿を見て　川岸で皿を洗っていたジュル爺さんが　今にも泣き出しそうな顔で　私を押し止めた．しかし　皆が精一杯に動いている間寝ていたことに対する自責の念にかられている私には　ジュル爺さんの声は届かなかった．　よろけながらも　最高の放射能異常を示す露頭の試料を採取しようと　ハンマーを振り上げてはみたものの　3度目を振り上げる力はもう残ってはいなかった．　近くに居たジャン・クロードが　見かねて代りに試料をとり　シンチレーションカウンターを担いでくれた．　突然倒れそうになったことも　これほど強烈な下痢に悩まされたことも　まして　ハンマーを振る力がないことも　これまでに経験がなかっただけに　あまりの不甲斐なさにひどく腹立しさを感じた．　しかし腹を立てたからといって　どうなるものでもない．

どうしても変調を来した原因がつかめなかった私は同行の一人に　手首を虫に刺されたことや傷口の囲りの変色や昨日からの具合を話してみた．　虫の形や色を聞いた彼は　速座に　ツエツエ蠅であると断言した．　ツエツエ蠅に刺されると　必らず　何らかの変調をきたすことも　彼の話で知った．　不幸中の幸といえば　そのツエツエ蠅が嗜眠病の菌をもっていなかったらしいことである．

キャンプに別れを告げる日の朝　下痢は幾分治まりかけてはいたが　痔の痛みには益々苦痛を感じるようになっていた．　食物も喉を通らなかったせいか　用足しに行っても　ごくわずかの糊状の便が血に染って出るだけだ．　固形物はもちろん　流動食さへほとんど食べてはいないのに　何10回も出る物がよく腹の中に残っているものだと不思議に思っているうちに　もしかしたら　この糊状のものは便ではないのではなかろうかと　新たな不安を抱いた．　チブス　赤痢　いろんな病名が次から次に浮んでは消えていった．　しかし今は　日頃鍛えている自分の身体を信ずるしかない．

テントが徹収され　すべての荷物が車に積込まれた後には　今まで人が居たことを示す焚火の跡だけがわずかに残っている．　毛皮の美くしかった猿もこの焚火で焼かれ　鷲は鋭い爪だけを残した(第25　26図)．　誰も居ないキャンプ跡を足を引ずりながら一巡りし後　フオ川の水を一口ふくんでみた．　自分が立去った後は　ここも再び静寂の世界に戻り　野生の獣や鳥や昆虫の遊び場になろう．　ここが早くそうした世界に戻ることを念じながら　私は　足音をしのばせて　皆の後を追った．

クランペル最後の夜　ジュル爺さんに誘われるままに暗闇にすっぽりと包まれた町へ出てみた．　ポツンポツンとランプが灯る町　タムタムの音色　そして　その音色にのって歌い踊る人．　どこへ行っても　どこからともなく聞えてくる夜の声ではあるが　何故か　今夜は一きわ胸をうつ．　用ありげなジュル爺さんと町角で別れて　ほこりっぽい道を　宿舎へ引返した．　今夜の宿舎は　別れを惜しむ人たちで賑わい　ふだんとは違ったはなやかさに包まれている．　荷物を整理し　日記を書き終えて　ベッドに様たわる頃には　再び日本の土を踏めないかもしれないという懸念はかなり薄らいでいた．

（筆者は　鉱床部）